





目錄

拾葉口傳

新式二十五條

吾家極秘抄

其角印書

十五箇糸

蕉門七ヶ傳

北枝傳 附方方昆



二鳥口傳の事

拾葉口傳

一 拾葉口傳第一卷はをすまを作てうららけん得あることよれを  
 先み為を天はたし賜と地とまうて陰陽の両義をあらふ別あり  
 二 目には海より登りハ云ありて中にて字の差別あり月をこの跡を  
 をとすハ一休とけいこうとみ出んハかのまのまのハ天とちも御あり  
 一 一 拾葉口傳の事とてあまにあされとも為の事一休をいふて  
 二 二 拾葉口傳の事とてあまにあされとも為の事一休をいふて  
 三 三 拾葉口傳の事とてあまにあされとも為の事一休をいふて  
 四 四 拾葉口傳の事とてあまにあされとも為の事一休をいふて  
 五 五 拾葉口傳の事とてあまにあされとも為の事一休をいふて  
 六 六 拾葉口傳の事とてあまにあされとも為の事一休をいふて  
 七 七 拾葉口傳の事とてあまにあされとも為の事一休をいふて  
 八 八 拾葉口傳の事とてあまにあされとも為の事一休をいふて  
 九 九 拾葉口傳の事とてあまにあされとも為の事一休をいふて  
 十 十 拾葉口傳の事とてあまにあされとも為の事一休をいふて



ふくませるれ潤なうしオシに公道に正んせて天地の中より一氣を  
正出するらにこれえぬぬる空のまのちのひありて必轉ををい  
むらうをえれと依の附方によりてきたるが如くありて切け身と  
あつて流あるとさうこまむくちありていふも、そんねのてよ  
ことあつていひの動字とあつてありて先他者依のち候るを  
たふふこの仰に自知冷暖の時をよとえらるるうこくこを  
いふも、そい晋子とく直括れ并論きてこらうて冷暖ん  
いふべしとあらえらるるまのこ先本の八月書をもくうのまね

一とひ惑ぬの情すもををうし何くかなぬをうく候く  
うこくうをいふととやうてそんは情あつたうていふん  
美れぬくまらやととらるるわ  
うけりき、ぬきまらうくけとそんあ細とさうとまかかん  
たはゆらうのまに水とあつてをうくこをうてまらうに  
柳のうらゐらうあまの卵  
しもの場の飛客とてのつこりとも柳の葉とよんぬ久えを  
うて水とてのうらゐらうをぬよかやまの卵とて出らるは



上卜の気候のあつていふまゝのこゝろにいとふなごま  
多柳とくくし付おき金持と云ふのるんのことせおのれと柳  
不一体のせぬふあねさよさうかしくかむきうの卯とくし  
まふらんあふみありしとくしとま境ふんみさくをさふなれハ

くはくはぬん 綴りくきくく

柳のくくのあつてあつて

あつてあつてくくあつて

あつてあつてあつてあつて

くはハ振のりきくくあつてくく柳のくくはくくあつてくく  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
くはハ振のりきくくあつてくく柳のくくはくくあつてくく  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
くはハ振のりきくくあつてくく柳のくくはくくあつてくく  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつて

あつてあつて



秋の夕ぐれとてちかき夕ぐれ

はるめきあめのさうそくさく 御身との安懐とくさるた  
つとちまひをくわんそする 勅旨の条々となつて 菊の  
まけをくさるれとちかき夕ぐれとて 夕ぐれとて 夕ぐれ  
まねるるも 夕ぐれとて 夕ぐれとて 夕ぐれとて 夕ぐれ  
夕ぐれとて 夕ぐれとて 夕ぐれとて 夕ぐれとて 夕ぐれ

まきくさくあつたまきくさく

秋の夕ぐれ 秋の夕ぐれ

秋の夕ぐれ 秋の夕ぐれ

秋の夕ぐれ 秋の夕ぐれ

○

本乃もけんけり 秋の夕ぐれ

秋の夕ぐれ 秋の夕ぐれ

秋の夕ぐれ 秋の夕ぐれ

秋の夕ぐれ 秋の夕ぐれ

○



うらやまのあまきつり  
りやうのよのひらきん  
秋ありし初瀬の宴あり  
秋風よ如くはるけり  
あつきよや 悠々けし  
○

増のこけけき  
あてこころいふ

ハキのめきん  
こころいふ  
おぼろの信

本白紙を興行  
まてのよ  
あやん  
あまきつり  
りやうのよ  
秋ありし  
秋風よ  
あつきよ  
○  
増のこ  
あてこ



又子安風あくみたくい詔字かてうふと定むるに所  
侍の才の眼よえりて詔と目んた詔とて思ふと  
そて即て詔をて用ひにけうふを詔くちくちく外  
の体より詔字の事侍し

一つけあつとよ在秋の三句例うさちを千句ハそれ各  
あく當たき一念やくるん在秋二句とあつとく定周の  
とちうちよ今法務かん

あく回くくちあひる然ん

くちくちくちくちくちくちく

在のちあつり狐あれ山

ちんくちんくちんくちんくちん

又く換しに句の在秋あつるに二句たき一古法  
是を秋二句あつるの秋をほるはくくくは換の掛く

一風録の中候あつるところ

石山やま文はあつる秋の月

一秋の成りてまに山川の口系花あつるは候は感



心と神と一そのありをわしむるのまればおのれをうつさる  
さそひしつらう一むとせむの事とされしとていふ人三十一文の  
行ふ事してさこの体とあるおとらるるをくしここの神の  
とらるる一いさんとこらるれば一いひつらうの  
こそとらるとれのれり悟りたふらるるうりよまあると神の  
ありむらう一とてさそひたふらるる一いひつらうの  
あにあらして人向御さくも神くも様なるよとていふまじや  
とに世の人らさるるいふまらるるうりよまあると一いひつらうの

とてあらうとていふもくもあつふんたふくも信法手法とたふも  
とてあらうとていふもくもあつふんたふくも信法手法とたふも  
負言ふれあふる元録とていふくも妙なるもくも文とていふの  
文とていふもくもあつふんたふくも信法手法とたふも  
子一とてあらうとていふもくもあつふんたふくも信法手法とたふも

とれ十のん折のさそるるまらひ  
とてあらうとていふもくもあつふんたふくも信法手法とたふも  
あつふんたふくも信法手法とたふも  
あつふんたふくも信法手法とたふも



あしきんむりつねはるんさうそ  
六月やまゝのそせけあーざうり  
それつらあし。こころ大極しよ  
も書るまきまのうらん油しき  
一はるらうそやとあしし何しうはるんさうそ  
あしきんさうそやろふのあやめしよ  
とあすうんさうそ

あしきんさうそ利はのるあー完

あしきんさうそやとあしし何しうはるんさうそ  
あしきんさうそやろふのあやめしよ  
とあすうんさうそ  
一はるらうそやとあしし何しうはるんさうそ  
あしきんさうそやろふのあやめしよ  
とあすうんさうそ  
あしきんさうそやろふのあやめしよ  
とあすうんさうそ  
あしきんさうそやろふのあやめしよ  
とあすうんさうそ



一 二十五日條日月むのうようきりんは木の附りそのまき  
あまきりん木の二にうらちきけり木のまきとけり取向くまき  
たきハ樹あまきと取向く定門のまきあらひ花りと取向  
きたをし樹のうらちきり木又木の二にうらちきけりまき  
よちあまきり花きり木のまき一うらちきと取向く  
けぬうらちき代のまきまきりくまきりくまき  
一 木の附りそのまきり木のまきり木のまきり木のまきり  
取向くまきり木のまきり木のまきり木のまきり

あまきりん木の二にうらちきけり木のまき

一 木の附りそのまきり木のまきり木のまきり木のまきり  
あまきりん木の二にうらちきけり木のまきり木のまきり  
木のまきり木のまきり木のまきり木のまきり  
木のまきり木のまきり木のまきり木のまきり  
木のまきり木のまきり木のまきり木のまきり  
木のまきり木のまきり木のまきり木のまきり  
木のまきり木のまきり木のまきり木のまきり  
木のまきり木のまきり木のまきり木のまきり

橘 柑子 橘柑 柚 柑柑 橙 枳殼



雲川橋 窓下

貞徳公羽り伝あり

一鐘 霞 新式非夜分

貞徳曰此をよみ所よるるを信るありん 鐘のありしをよみ  
をよみしそあむとありしを信るありんをよみしをよみし  
のこころをよみしをよみし

一月のさゆり 秋のさゆりなる節に 冬に氷なるなり

月のさゆり人 真カいふよみてさゆりし秋の月のさゆり人さゆりなる

ちりねし秋のさゆりなる節に 冬に氷なるなり

一でこころなるなりしをよみしをよみしをよみしをよみしをよみし  
いさねいさねとこころなるなりしをよみしをよみしをよみしをよみし  
しこころなるなりしをよみしをよみしをよみしをよみしをよみし

一清き水なるなりしをよみし 白鳥とわかれ

一秋さねなるなりしをよみし 口授

一徳母夕しふ十三夜なるなりしをよみし 枕下子なるなりし

一花さなるなりしをよみし十月のさゆりなるなりしをよみし 花さなるなりし



一 ちまんの七夕 紺子の屋敷 二月 又妻のついで 春季

よてまゝいあつてさうさう

一 二種のそら ちまんの屋敷 二種はあつてさうさうとよまね松林

つらつらりきまゝに十寸松のそらよあつてさうさう

一 松林のそら ちまんの屋敷 ちまんの屋敷のそらよあつてさうさうとよまね松林

一 松林のそら ちまんの屋敷 ちまんの屋敷のそらよあつてさうさうとよまね松林

一 松林のそら ちまんの屋敷 ちまんの屋敷のそらよあつてさうさうとよまね松林

長明

一 雑の発句まつ付合のそら

一 雑の甲あつてしめを啼かせん

一 雑の甲あつてしめを啼かせん

一 雑の甲あつてしめを啼かせん

一 雑の甲あつてしめを啼かせん

一 雑の甲あつてしめを啼かせん

一 雑の甲あつてしめを啼かせん

一 雑の甲あつてしめを啼かせん



とくはらん一石の地をこぼれおんまき  
とくはらん一石の地をこぼれおんまき  
とくはらん一石の地をこぼれおんまき

一 正言古法曰住よんはなまきんたるぬんをけりおんまき

「よのめんまねや」ゆゑまきんさ月とくは住よの里 律字 明文

万和まきん 初冊集まきん

住よんまきんまきんまきん

佩升

一 住よんまきん 住よんまきん 神まきんまきん

一 六心の花まきんの一石之修房新論抄ハ云云云云あり

松橋のそと新よんまきんまきんまきん 冬ハ別ニまきんまきん

まきんまきんまきんまきんまきんまきんまきんまきんまきん

一 六心の松橋まきんまきんまきんまきんまきんまきんまきん

新まきんまきんまきんまきんまきんまきんまきんまきんまきん

あつまきんまきんまきんまきん

まきんまきんまきんまきんまきん

あまきんまきんまきんまきんまきん

まきんまきんまきんまきんまきん



敬うれんれんあいにむこね  
よきあいにれんれんあいにむこね  
いとすあうそ

あうりあうりあうりあうりあうり

おのこもむねのあうりあうり

あうりあうりあうりあうり

あうりあうりあうりあうり

あうりあうりあうりあうりあうり

あうりあうりあうりあうり

あうりあうりあうりあうり

あうりあうりあうりあうり

日

あうりあうりあうりあうり

あうりあうりあうりあうり

あうりあうりあうりあうりあうり

あうりあうりあうりあうりあうり



あれとくらえつまんせわれしつたまのふりてはかき  
くまなくあるましよ

一本式表方

賦金俳諧之連平

これあやむしとてふものハ何 花金

紙衣の襷よ 和紙の栞 夜子

草さうつゆみんむしとて 什金

竹ふくらむとて 吹金

あぢやあみんうごめりや 栞

あふゆゆとて 多持

女御あぢやとて 今ち

山とて 今山

とて 今弁

とて 金尾

十句の表ハ式とて 配糸の賦ありとて 回子

名をよとて 法也



二十五箇條

目錄

- 一 一のうらみつらとまゐる
- 一 二のうらみ二のうらみ
- 一 虚言のうらみ
- 一 實言のうらみ
- 一 起定轉念のうらみ
- 一 又のうらみ切字有
- 一 眼顔字有
- 一 實三事亦五事
- 一 白の目眩
- 一 月花のうらみ
- 一 花のうらみ
- 一 南無のうらみ
- 一 二事のうらみ
- 一 一のうらみ
- 一 二のうらみ
- 一 三のうらみ
- 一 四のうらみ
- 一 五のうらみ
- 一 六のうらみ
- 一 七のうらみ
- 一 八のうらみ
- 一 九のうらみ
- 一 十のうらみ
- 一 十一のうらみ
- 一 十二のうらみ
- 一 十三のうらみ
- 一 十四のうらみ
- 一 十五のうらみ

目錄

芭蕉翁俳諧新式二十五條

俳諧の道とよむ事

一 一人曰く曰俳諧ハ何のなりよまゐるの詞新也又曰俗語  
 俳諧をたむむたのこ又曰俳諧のそ出てもろわたり又之は  
 道に達するは徳道よと仕子ありてその実有る道枝を  
 五の道よ俳諧有る如く此と考へて人書ん及てたまふの  
 ろく俳諧のかたちん五の道よの次よまてんハ向上の  
 一 芭蕉翁のたむむたのこ又曰俳諧のそ出てもろわたり又之は



五十一

口行一約字いふ事  
毛林は法ニ獲蘇し心決

俳諧の二字あり事

二言まをりて此ハ此のまこと

一俳諧のまこと古来に定数堅きありあつたは字ままは俳の俳り  
まをりてま或ハ史記の得地を付して俳の字に定するも定

醫者の理明と知ると古来集りて此の字を用ひありれは此ハ  
古来まこととありまこと何れハ人時ままにまことと変化す  
此後此のまこと事

此後此のまこと事

一俳諧のまこと古来に定数堅きありあつたは字ままは俳の俳り  
まをりてま或ハ史記の得地を付して俳の字に定するも定

思ふ向てまの相のまは念相念相ハ一物を對して又せんまを  
思ふハ一物を對して又せんまを思ふハ一物を對して又せんまを

一物おまをりてまの相のまは念相念相ハ一物を對して又せんまを  
思ふハ一物を對して又せんまを思ふハ一物を對して又せんまを

一物おまをりてまの相のまは念相念相ハ一物を對して又せんまを  
思ふハ一物を對して又せんまを思ふハ一物を對して又せんまを

一物おまをりてまの相のまは念相念相ハ一物を對して又せんまを  
思ふハ一物を對して又せんまを思ふハ一物を對して又せんまを

一物おまをりてまの相のまは念相念相ハ一物を對して又せんまを  
思ふハ一物を對して又せんまを思ふハ一物を對して又せんまを

一物おまをりてまの相のまは念相念相ハ一物を對して又せんまを  
思ふハ一物を對して又せんまを思ふハ一物を對して又せんまを

川あやう一巻の成籠るハ也

み元句ハ切字あり事



の  
説話の二 ありされ共家子ハるいふはまてお人ありと有候  
しる所より去るに 誠なる名を別とさすむつれ有言候に 拙者ハ  
及候と志す志ふ家子ハ以下より 説話の二はあり志する一は  
野々々穿鼻をよるべし

虚実の半

弟拙ハ虚ハ所テ実ハ働ク實ハ所テ虚ニ働クへ久々實ハ己を  
まて人をもくむる不有候はたまう散りてうけし月のとあり  
を揚むと実ハ働む連累の實より虚ハ働むハおむといふハ  
實より拙者ハ連累より上物より上ハ虚をつくるより虚ハ  
實あるは又半と云ふ虚あり 世智辨ハ大虚ハ實ありと云  
義禮智と云虚ハ虚あり者ハ世ハ掃く一とありハ又多なる  
此人より一と家子の 名をふつ

変化の半

又半より一ハ変化の有りなり変化ハ虚実の自在をふたり  
黒白善悪ハ言語のあやかりて黒きを黒一と云ふ黒と白一  
と云ふ白と云ふは言はく変化の有りなり黒白一合する云ふ  
て天候の變化に於て一人ハ変化をされと返候も有候なり況  
やといふも云ふなりありなり天候はありなり云ふなり  
其の變化ハ云ふはいふは其のれは言はく有りとのなりハ白  
白ハ変化も有りなり云ふは変化を云ふては変化に云ふは  
同じのなり云ふは云ふは同じのなり云ふは云ふは云ふは  
変化といふは有るなり云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
そのりて付く候なり云ふは云ふは云ふは云ふは云ふは  
むの拙者の甘くばり候なり云ふは云ふは云ふは云ふは  
きしあり候なり云ふは変化ハ世実の月をよりと云ふ候



一 松竹の切字とよに足ふの心く扱ふれまよふてり  
志や枝のめりたるに切字あるゆゑとてしてそのきれぬ  
と記しぬゆゑあらん

桐のあよこけ下啼るる 桐のうら

はり五文まゝて心を傷るこ切字のよんこかうしん  
あつて先にならぬの音ふくともいへぬ

松よ切字あるま

一 松ふとらうと切字よてあつて先初心入のそ

えうう正のほよつとくむらそあらう

つらくのちとむらうやまらう

こされてつとむらうつとあつた

けり松竹の切字とよに足ふの心く扱ふれまよふてり  
志や枝のめりたるに切字あるゆゑとてしてそのきれぬ  
と記しぬゆゑあらん

とかくれ松竹の切字とよに足ふの心く扱ふれまよふてり  
志や枝のめりたるに切字あるゆゑとてしてそのきれぬ  
と記しぬゆゑあらん



己の心をかけろぬるういけいなるよ木山川の一字ニまね  
は情をわけて字入り集情をほく面きくこの振とよの一字  
よてぬのあわさるとるれう

オにこよの心持集あま

一オこのあうよ文字のよ進ちあま一人のさるあぬのオ  
るんよ下のあをわけて改のう、及わを金きたぬらうは  
理をあると即しての字はの字のよこのまらんとてよ一オと  
こよのオこのまらこ、るのオのまらとて振出する

世の文字をいふあうよと成んたる振あうの神らるを揮字の  
字の少所あうよとて人の推察をう

うらふ手もすくえとてわの字  
うらふ手もすくえとてわの字  
余りてあうよのまら此身このうまよとてさうとてさるる  
のあうよとてさうとてさるる

まらあうよのまら一巻の变化にこのうまよとてさるる  
万物スレて流るるもてわの字もはる目まてはるまら  
あうよのまらとてわの字もはる目まてはるまら  
をさるる一此振の中品は下のたのうて中品は上の人とて



己の心をまけろとあるよりいかにするよ木山川の一字ニある  
は情をわけて客を来候と云く面きくこの振てよの一字  
より一語のあはれなきと云れり

オレにエの小枝を束ある事

一オレこのありは文字の正さききる一句のさるぬぬのオレ  
るんく下のぬぬをわけて改の句、及ぬぬをぬきたぬぬは  
即ちあると即ち一の字はの字よりこのまじりと云く一と  
こみぬオレこのまじりく一ぬぬの中みまじりと撰出する事

オレこのありをまじらされぬやとく正さきなる事と云く

己の心の静まき事

一己の心の静まき事後の句まじらぬぬとあるのゆゑに  
オレにぬぬの振てよのまじりぬぬ折るるまじりて一人はらや  
まじりてぬぬのまじりて一巻の变化にこの句まじりぬぬ  
万物をぬぬに流るるまじりてぬぬのまじりぬぬのまじり  
あるにまじりぬぬのまじりぬぬのまじりぬぬのまじりぬぬ  
をぬぬ一此のまじりぬぬのまじりぬぬのまじりぬぬのまじりぬぬ







花よさらばをける事

一世はあつた人さうのうらうとよふとあれと花とハカ  
物の心は花うらたと、花は身は花嫁さあつた心は心は心は心は  
あつたうらたそのまつくれは花うらたと、花は身は花嫁の二つは  
すうれつたれのもよとあつたよと、花は身は花嫁の二つは  
花の心は花うらたと、花は身は花嫁の二つは  
あつたうらたそのまつくれは花うらたと、花は身は花嫁の二つは

けあつたうらたそのまつくれは花うらたと、花は身は花嫁の二つは  
あつたうらたそのまつくれは花うらたと、花は身は花嫁の二つは  
あつたうらたそのまつくれは花うらたと、花は身は花嫁の二つは

一月はあつたうらたそのまつくれは花うらたと、花は身は花嫁の二つは  
あつたうらたそのまつくれは花うらたと、花は身は花嫁の二つは  
あつたうらたそのまつくれは花うらたと、花は身は花嫁の二つは



すんこの二つありくゝに雲化のたつることをえり  
二季に候ふとも事

一 古に三季よりわらまのこゝに候ふといひ秋のせうりやと云  
すんこの秋に候ふ時と候ふ秋の候ふなりと云はれ秋をこ  
ひ秋ありと云ふこと或は季の二季より名月を候ふ時と云  
植ものすゝかありと云ふこと又云ふのさへ候ふて一西瓜に秋を  
より一牡丹をえりと云ふこといふも季の候ふことと云ふ  
夜に秋をこ月ありと云ふこといふ詞ありと云ふ月あり

也の季より一雲をえり月ありと一こをさといひ秋の候ふこと  
入ふことと云ふは冬を季と云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
吾を季と云ふ事ありと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
春を季と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
秋を季と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
冬を季と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと



及元夕の竹人喜まへ用る事

一ある 夜ふゆえん 豆袋 頭巾の 花 扇 袴 等 しのぶ  
に用るものより ねむりまゝと 似て 南無 宗<sup>音</sup> 下 さい 合をく  
る へん されし 夕の さふり 一 惚 へん た へん なる こと  
へん 夕の 袴 子 乃 ぶ 子 一 此 拉 へん 似 の さい 合 を ころ  
文 字 の さい 合 と 袴 子 一 へん と ちを

及元夕の竹人喜まへ用る事

一及元夕の袴 竹人喜まへ用る事

ふさげ 袴 子 あり 一 夕の 一 死 怖 おの へん なる こと  
は ねん 袴 子 合 と ちを 一 怖<sup>音</sup> を 袴 子 なる こと  
及元夕の 袴 子 一 同 と 似 へん なる こと 一 へん なる こと  
く なる こと 一 袴 子 同 と 似 へん なる こと 一 へん なる こと  
自 他 の こと 一 袴 子 合 と ちを 一 袴 子 合 と ちを 一 袴 子 合 と ちを  
附 向 あり 事

一及元夕の格 袴 子 一 夕の 一 袴 子 合 と ちを 一 袴 子 合 と ちを  
ちを 一 袴 子 合 と ちを 一 袴 子 合 と ちを 一 袴 子 合 と ちを



これ成就した付向の念の強向を感得せしむる故に  
強向を定むれば極あり故にして夫の平生の事こそ極なり  
申してはた、五分あること定ふべしおふくありかたのこ  
と作られし付向の事調子のありあはれとてよく  
出むつべんちきとてよくあり入るふんよきありき  
一たのれしを定めてこそ俳諧の世情なれとある故に  
きりぬれ但ちよりの付向をきり先立てりて後には  
くせとあらむのむねあはれとて極ありの事あやふ

強向の事

一は向の事強向の事とてわつしその強向の事一字に  
こやもたさつて是を執中の法しあはれとて申を取  
た強向の事付向の事とてわつしその強向の事一字に  
あはれとて申あはれとて申あはれとて申あはれとて  
初まらり 塗土屋 暖る兼 村角  
路る 手招子 月 新垣  
わけ強向の事とてわつしその強向の事一字に



白古其の法と他は正格くは此のよはふここの法を  
志す小人の作語なる事ありを二や三やの語句より  
其他の法とゆふに之ありは其の好意と志すれども  
此法を志らざる人の我多をつくして後よおしとまふん  
其他の法とゆふに之ありは其の好意と志すれども  
其のよはふここの法を二や三やの語句より  
志すを志すよはふここの法を二や三やの語句より  
志すを志すよはふここの法を二や三やの語句より  
志すを志すよはふここの法を二や三やの語句より

その中より始めを志す事あり天地人のため  
けを志すその中より始めを志す事あり天地人のため  
の語句より志すよはふここの法を二や三やの語句より  
志すを志すよはふここの法を二や三やの語句より  
志すを志すよはふここの法を二や三やの語句より  
志すを志すよはふここの法を二や三やの語句より  
志すを志すよはふここの法を二や三やの語句より  
志すを志すよはふここの法を二や三やの語句より  
志すを志すよはふここの法を二や三やの語句より  
志すを志すよはふここの法を二や三やの語句より  
志すを志すよはふここの法を二や三やの語句より



恋の句九事

一恋の句の多く古式を用ひたまふにあらむ娘娘村郎  
傾城ホの文字の各同そん恋のつくれ只あ句の云云  
あゝあゝ父まよひのころへふれ恋と何うこふゆえん  
他のもう恋と一白よて折れつるよ一恋の風物  
花美らんに二句よるあ句をいれし先ハるよて陪功  
のむをささるるちうりそハあ家のむ句すて他のもう  
字數をよへる

切字の句九事

一切のよる法抄はあまのむねし今世にこそん推して  
まぬら切大まごころをいづる切のよるよあふへあてら  
いこの能書れ出する後をいづるちうりそをいづる  
其か三陰切をよ切をいづるちうり世の流るわねく  
まゆや

二字切

ゆきよあらの底やあらや

三字切

よせつよよとあつまねいむれ



三位切 梅子茶末ア子れあらしりけ  
又ま束雲う澄空の吹り

月よふ茶山時る物つらや

とみゆ六目耳口のにほゆるめくれつる梅あ草叶の  
久心乃にほゆるをえらう一とれに三まこま切らるの年  
やとえてつらましくくひしあはせらしく三字同をよて  
切一不こあふい

高るの月とつらやさる物と啼るはふ

とあふへ知のあふしておくたれに如の字ん切字よあらんこ  
たらひあふくけうて改抄にわくまかへ字の詮をる  
切字百あふく切字百まきり一或ハ

夕影や秋はつらく乃歌うる事

とあふへ上乃夕らや秋はと白ゆきを切てハの字よて  
かえた道ハ切字よつらふんこよれあふまうらう

猶うあふやむとれ物々の物月

は乞ハ味の切らふく 言の物月若てし中よすのこいりゆきさくさく せむし時へ行くとてさすて物々の物夕

せむし時へ行くとてさすて物々の物夕



この中の心と測るる句法也

人よふと云はせて我はと云はれ

此は挨拶やしよと一句は自他の居おあるやうに二  
三の切は系家の発明より他はむらつて先さくを合ふ

この句法も

一能認さし合のまにえおひ草のたよきさうふつーかー  
此は新志のさうひちくふれと二を力りつらよて初めは  
後分ちるまつー一句の好意を先論してさし合後の詮

並ありつーさし合のまにえおひ草のたよきさうふつーかー  
つー變化の不自在する世さし合の扱あり方れ法式ハこの  
境ありてさうさう

二年位の本の句は

新志の初め

此は発音の発音もさうさうれ取句とオこととさうさうとさうさうと  
さうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうとさうさうと  
して此の初めと節さう曲節ハよつ初め詮論するも  
さうさうとさうさうと







女房のしきたり

一素武の深川よてきさるのうよきとけらるるありし時  
をいそぐ人移るれんてうよは所立の格式とあり

お 兼の柵よきとるるありて

附 女房の扱むの御るよあり

いよおのうのいひとてふのお書とてらるるありて  
こゝろありとけらるるけれんおの心とおこ  
てこゝろありとてらるる托<sup>禮物</sup>扱は白とよものありて或は

おのうと軍書のとて能狂三とていふるありて  
こゝろありとてらるる風情あり

お 書通の扱むの御るありて

後 こゝろけらるるありて

いよおのうのいひとてふのお書とてらるるありて  
こゝろありとてらるる或は女房のありて  
けれんおのうのいひとてふのお書とてらるるありて  
せきりきとてらるる



菅原の月の事

一ある時ふゆのふれあめよて菅原のふゆよこちのこち  
よ月よこち

菅原のあゆめ神のふゆよ

ふゆよ秋のふゆよふゆよ

八月の秋のふゆよふゆよ

ふゆよ菅原の月よふゆよふゆよ

ふゆよ花のふゆよふゆよ子月を

八月の月の事よて八月の月の事よ

ふゆよふゆよふゆよふゆよ

ふゆよふゆよふゆよふゆよ

菅原の月の事

一ある時ふゆのふれあめよて菅原のふゆよこちのこち

ふゆよふゆよふゆよふゆよ

朝よふゆよふゆよふゆよ

ふゆよふゆよふゆよふゆよ

ふゆよふゆよふゆよふゆよ







その字又あつしおのまのつれづれ

結を少ぢ大お尻お

たはハ

とら少用也

ま

とら少用云この時を半

急務

式ハとも痔とけ時あつし

え中の

消キエ

杖笛机

け時の杖のえの字

へ五衣かた

はとつへまよやう茶ハ

縁之

此れちう衣更りかへハ口

あつしあつしあつし

わふ初

盟多うわつ

江くし

住居山ノ

法ホツ

あしとハ入声

雑サ

ちとち

つれづれツノ

ツノツノ

新式二十五條大秘訣

蕉公相奥書問答之元禄七甲戌六月傳書  
東花坊支考厚之室永七三月廿二日

五判略之

芭蕉書屋



石五ヶ条公約之掟

三言子志本支考、秘傳書也

文久二年暫く以なく此十月中旬

後學子有斐書部謹寫

五言家極秘抄

幾句脇義三の心得

一諸書ヲ読あれども貞徳御抄は不幾句ハ親脇子義三ハ御耳  
と心ゆされハ抄一付る人お、あやう御しく付る法されとも御句  
こそうハ付味の親「きこむも七〇元ハ親子のゆききん味を  
オこハくえられし付るく、御耳つり、彼るれとも亦の  
大るハ御りとも御るものるや

みそぐの大念四ノ之







を出一丁通るこぼれ

ふせとれこぼれとせし梅のむらさきとて之を降し

去らぬとてけりおれえんあつ所きとけし月の出ると

めけおとりのなまをひのまをのあつこ月のおとるちりる

のころをせしる新化るころころとるふん

あつめやちり子つころ梅さく

あつふれさるおのりころ 信徳

能治めてるさつとつころとる

日向對白の事

おのりさつ川ちりころ鏡さる 女仙

こよる水乃後んけりるふのさる 香雪

日向小ころ

あつめやちりき梅とつころと

あつけあつ川ちり溝

おのりおれちりおれ又是を遠いけりる不在けり

あつめやちりあつめ **打付** **打添** **引遠** **心付** **頂面**







なる依らざる根をこ在るうく定て為す中野  
定の内言はるるう其た望う定ううしよえと

同さううは

一にさううのうはあはるるうきんめを

本はあちるううりる

とあひうきんあれうあちるううしよ  
るうううううううううううううう  
うう 他後

世はあちるううりる

ううあうううううううううううう

うううううううううううううう

同さううは

一にさううのうはあはるるうきんめを

山茶の九輪うううう

うううううううううう

うううううううううう















一 恋のうへにふりまわすはくくも捨ててゆくは  
もれおの仕立人く恋のうへにわかれもてえ恋き  
らあまてそのうへに恋しはくあまの恋うへに  
あまて付の恋するも捨てて恋するはく  
くくあまも恋するはく

二

さらけぬれあまの恋

あまの恋のうへに恋するはく

みれはよせりし

一 恋のうへにふりまわすはく

世の甲をわらうはく よき好

うへに恋のうへに恋するはく  
あまの恋のうへに恋するはく

あまの恋

一 恋のうへにふりまわすはく  
あまの恋のうへに恋するはく







追尋七回をうへ末の懐向し書了と色は此情の所を  
あまのりて望まふ末を所のし

花のうた事

一昔のうた君服の片はらに太ふこりて花のうた  
のり帰むの正花をあらん少許の候はこと味はよま  
るる人の老うしをまもたよこ併旅を玉珠のけ  
切もさき候をくしとらうしよのいひ切を正花の  
うた用の事ありし

花のうた事

一おののあしとさあれもまあましよはらうあ人花  
さうし二おはまのうたははまのこもあまのう  
り六花のうたははらうんちうあうある世とけ  
うとこらん花綱うたははらうのうたはらうは  
あまのうたははらうのうたはらう

花のうた事

花のうた事



是ハ赤の毛物也ト云々也の意ハ此の書ハ云々也  
云々云々云々云々也

あつらんはよひらとるるるる

少所云々の云々云々

是ハ赤の毛物也ト云々也の意ハ此の書ハ云々也  
云々云々云々云々也  
云々云々云々云々也  
云々云々云々云々也

名所の云々の事

一名所の云々の事  
云々云々云々云々也  
云々云々云々云々也  
云々云々云々云々也

揚句の事

一揚句の事  
云々云々云々云々也  
云々云々云々云々也  
云々云々云々云々也  
云々云々云々云々也







手付人此の市の休まろし  
石陰おんるおおのり  
陰  
ちし但し新のりまろ又まろし

月也むしをむさうの事

一 ちちろしむのりふに月々々  
あふ月日照てうめうとあふ  
るるはるるあふのりあふ  
ちまやうはむゆきまふいさう

ちのりてむつこ

一 ちちろしむのりふとあふ  
けんあふのりてむつこ  
あふのりてむつこ

く押字もむさうの事

あふるあふあふあふ  
あふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふ

ちのりふまとの事

一 ちのりふまのりあふ  
あふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふ

あふあふの事

あふあふのりあふあふ  
あふあふのりあふあふ  
あふあふのりあふあふ  
あふあふのりあふあふ



然とて一編載り一代は万々あるも

ついでに

一石のうらよおろちるけとつるまう

月とてはるるまう

夕日とてはるるまう

なるとはるるまう

ついでに

一上のうらよおろちるけとつるまう

ついでに

ついでに

一上のうらよおろちるけとつるまう

夕日とてはるるまう

なるとはるるまう

ついでに

一上のうらよおろちるけとつるまう

夕日とてはるるまう







是ちや御しるるう 故るのるも 一字の紙にちや切し  
ち切り多れし

と字切の筆印をさうしと云

一古来と文は切りのうらまはち方中を文書のあまあう

ねんしあま切し紙と 花はちり 二紙

かきし切り物と 花はちり 紙色

又紙

梅の紙はちりうらまはち 枕つ包

ろ文はちりや 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と

切し又曰やうらまはちを 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と

うらまはちを 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と

切り紙はちりや 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と

切り紙はちりや 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と

と紙字はちりや

一 万のうらまはちりや 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と

ちよと 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と 紙と



字のうらむるやしくそ女のこころはこころ

お伊豆山をこぼれうらむらむ 宇代

又熊子

人恋しあやうきやそらるるらむ 信徳

けとこの字書は白のつらうきしあふ七文字あつめ切字押字

とこの字書には秘おハレけさう油ナラヌ字をそめつて白を

化るよ依てけさう又ハ平句をさうありよのわささささ

はませとさうしさうしとあふん出まらさうとさうとさうとさうと

お伊豆山をこぼれうらむらむ 同おまこけさうたしとる体と金中  
さすけあまけおひささうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

附方と事

一風情 詞附 埋附 心附 相對 卒附

遠附 心附

以上八体也此外二十は体 三十二体 八十体とみな

この八体ヨリ分けたるはこれあり



はこそ事

一添随放送 是を以て道と云は是付方ん法

子一此はまきまらうて人お裁將廻あおく連さ  
ころし

用とおおふお心 随へおふよま心

随へおふよま心 送へおふよま心

右は道の廿八節道の二道すはるこ又ハ体の付方とあり  
甲板らふと遠回らうとさるあ

一は例はの事

一「ま」のハお切を申さるゝ知知知知 あり

まあつまありて仮名ニこま讀御む 思へ 切む

そのおひより一字まのよあまはは切字まらうとん

むの字もまん二やのうのく一はあねと去又この一字例を  
切むらんまらうとんあ

おれあうとあハ板村 村のま 宗御

あうとあハおくまらうと 宗御



又

世にことじむ新子そとれれそと出

此句は未だ未のころはちろろくふ也

たふさくまふさくの事

一 經母とてころよ折くとの折くはまうころん

書ろく經母衣ふふろあ

極秘抄上終

世の家極秘抄下

一 貞徳曰連歌賦物をそんり俳諧よりそとるに俳諧は百句

百句といふ俳諧より詠する連歌なる俳諧より俳諧の連歌と云

是則兼ね俳諧の一名その連歌と謂へば俳諧の連歌なる

俳諧とてなる俳諧の連歌なる然り則俳諧と云名の連歌

なるも賦物なるおまへんは是は詠といふに俳諧は其なる

仍て連歌なるも兼ね連歌なるも名そのある連歌なるに賦物

なり則なるに貞徳は俳諧と名そのある連歌なると云



正保二年三月

於花言子咲定之

賜しんを留の事

一先余も日よえを留の留ハんせんせれより一在  
こゝに留るるをよそを留へて心守るるをいふ由白  
留をよそをよそを留るるをよそを留るるをいふ由白  
あてハ一ああをよそ

をとりくはす詠のまきりまきり

かきりまらけは新字よりむててあてよて留るこ

雑の散々の事

一雑の散々の事一草一草のつらとむて祝言むて秋の  
時式のものゝ後のおちやある事おわてむくおなま  
雑と詠それ皆運俳も常は不用太密秀吉も異国征伐所  
去上白法

うらむちハやうてあてきこくを甲

子細を志すもて名吹草丸











ちるふりまされしものゆりも  
それこそともまらぬらん

一 夫とあひつゝあはる

揚りまきさくあはくこもをあさく

そわさあつとくしきやけりて

はるしき百城のまよ揚り性となすは武常の御製と  
けすくハ言ふとももとまらぬ也

一 夫とあひつゝあはる

くし又るやまふむい晴るるとよく物ともさけりり  
のあしこをささけり人核るもこまのよさしくく  
こころちるも

一 とうらの夕ハ別てけつてさくはく

一 陽の夕まじけりあはハオニまへて函をさくし

一 名所の昔夕まよ所の根もさく昔らあはるとあつた

りつゝいあつたつて

一 昔夕のあつたつたつたつたつたつたつたつたつた



夕のあふと 旅のつよまのあふと 春あふと くらと くらと くらと  
あふと くらと くらと くらと くらと くらと

一 文の夕よ十月朔日より 旅を何とせぬと くらと くらと くらと  
くらと くらと

一 此の夕よ 夕より 文あふと くらと 旅のつよま くらと くらと  
一 くらと くらと くらと くらと くらと くらと くらと くらと

くらと くらと くらと くらと くらと くらと くらと くらと  
くらと くらと くらと くらと くらと くらと くらと くらと

一 我々の日はよまのあふと くらと くらと くらと くらと くらと くらと

一 打この心あふと くらと くらと くらと くらと くらと くらと

一 木葉のあふと くらと くらと くらと くらと くらと くらと

字をぬきて くらと くらと くらと くらと くらと くらと

一 光のあふと くらと くらと くらと くらと くらと くらと

一 光のあふと くらと くらと くらと くらと くらと くらと

くらと くらと くらと くらと くらと くらと くらと くらと

くらと くらと くらと くらと くらと くらと くらと くらと



山女をさすはふれおきまわらば

おて都より一先の句をわたりてうむひさう併このころん  
やうれまん下ら一問とあおの心念さうこ世の世まは根よ  
田のありとあうれこ

一も明にまを捨ててふをぬてとあを

一いしこく<sup>イシコク</sup>津ぬとまこころいしあうさう

一とらおきとんはあはれのあおをさうさうさるのほこしを  
わきかちと云はるるにさうせんかきさかかたのまの

のいささう

一とらおにけしあはるるはさうとくさうあはさうさうし  
得るあうとさう

一仙洞と云はは採り付てあをさうあをさうさうさうさう  
おさうさうさうさうさうさうさうさう

一あしこまをまきあうさうさうさうさうさうさうさう  
はさうさうさうさうさうさうさうさう

一女時乃矣久こころいささうさうさうさうさうさう











外五未本の「ハ」に但けまゝに「ハ」の字を「ハ」の字に  
てゝも「ハ」の字を「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に  
ハ

一三世の「ハ」の外「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に  
ハの子細を「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に  
ハの字に「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に

涼  
ウキクシ

悲  
ウキクシ

此は「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に

「ハ」の字に「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に

又

一「ハ」の字に「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に  
ハの字に「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に

一「ハ」の字に「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に

ハの字に「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に

一「ハ」の字に「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に

ハの字に「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に

ハの字に「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に  
ハの字に「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に  
ハの字に「ハ」の字に「ハ」の字に在る未本の「ハ」の字に



一 一 体のうら切はさうくあつてんうを依りて之味をう  
て二のうら切はあつて誠の切ははた人の所へて用と新を  
よくきそん用いおの所ふおえと新の用とをきて耳  
附たりやとそん切もいふあつてんうとそんうとそん  
一 一 又二字こま切とて句は松の伝りきしよくそん  
のうら切はよきぬらうんやとそんうとそんうとそん  
二 二 字あれは二字切らなあれは三のうら切はあつてんう  
ヤリ口傳



一 一 一 一 のヤ切字

おつてぬらう切まうとそんうとそんう

あつてぬらう切まうとそんうとそんう

りそん切らうやのうら切まうとそんうとそんう

あつてぬらう切まうとそんうとそんう

てしとそん切らう

一 一 一 一 のヤ切字

あつてぬらう切まうとそんうとそんう



是ハ雅リ希ク振ル月ノある夕まゝあるやと月を名メ  
ちちちちと云ふ。押ハれたるしあるは伴ハ其のやと何と  
上の五文字にハる月やあると扱ハ公のやと扱ハる  
ふと云ふと云ふなり

一 只云ハ也切字也

月やあるは押ハる月ハ今云ふなり  
扱ハるやと云ふは云ハるなり  
又ヤと云ふは云ハるなり

上の五文字の三ツハ玉ヤと云ふは玉ハ云ハるなり  
押ハるなりと云ふは玉ハ云ハるなり  
一云用乃や 切字也

扱ハるやと云ふは云ハるなり

上の五文字は玉ハ云ハるなり  
故に云ハる押ハるなりと云ふは玉ハ云ハるなり  
玉ハ云ハるは玉ハ云ハるなり  
玉ハ云ハるは玉ハ云ハるなり



一 すゝろくや 押はるる

、杖をわらうりまをせりしやうひて

りそんあみまのまはれやうゑてせま子のまはれしうまを

こゑりしせのまはれしうゑて、押はるるまをせりしやうひて

一 押はるるや 押はるる

はあやう柳うゑれの体いひて

やのうまこと。のうまをせりしやうゑて、押はるるまをせりしやうひて

やのうまをせりしやうゑて、押はるるまをせりしやうひて

やまてハ、削りしやうゑて、押はるるまをせりしやうひて

一 中ひや

はあやうあ切つたまをせりしやうゑて、押はるるまをせりしやうひて

大方を九回とあはし

はあやうあ切つたまをせりしやうゑて、押はるるまをせりしやうひて

はあやうあ切つたまをせりしやうゑて、押はるるまをせりしやうひて

かやうと削りしやうゑて、押はるるまをせりしやうひて

とさむくまをせりしやうゑて、押はるるまをせりしやうひて







二葉集巻

女房の心念相は一念を起しては六物の中はおぼろく  
立むる時花の影も月も海向を流るるに自在の  
心を起しては心を起しては心を起しては心を起しては  
破の心相の起るをうらやまふ心相の起るをうらやまふ  
心を起しては心を起しては心を起しては心を起しては  
心を起しては心を起しては心を起しては心を起しては  
心を起しては心を起しては心を起しては心を起しては  
心を起しては心を起しては心を起しては心を起しては  
心を起しては心を起しては心を起しては心を起しては



あつちく又命を致曲流と和ふは詩に記す  
轉合と格あまもや我流流う十七文の中は序致  
曲流のうをこのされはる向ふふ不ゆるはと先師  
らむ本あとの園奥音ちる在流句

後日るるを流すまを流す寺

さうのわふらと并や日々行

えらた向舟の日を流すわら

在ま心所者のうよむりて八玄おの半あて一和

一々よ述りくは流すは流すありて玉詮花のうや

月いふくく十七文あまのそ流すをすくをそ流す

振五神の流句

下あま

振振ん向のうやう一 秋のくれ

お原

流くくけりてそ流すのそ流す

こころあまの流す流すくこのそ

お對

松の志けをくく流すのそ



遠附

月あゝの五は鍼まゝ 寒く入

や、まぢち此市の人たれ

秋は清しつちやまほそ小松川

深湯

こきしひも里乃をささるるこり

赤糸七を七あふ休登ひき振

對付

暖くましくこき振う依

根ハ谷をよそあて句の定味のちるをな用と付  
一与のこ曲りけを求て面白くはまてよれぬるをむら

て八根のるよあは又よよと留あふありあひまきり  
やるよあふとて折の教いよとる為得定ち王の  
二事あり

まゝる他二法の流る

杉形 むら花日初定むるちねうちんて

吉山 秋の風 遊流のこくあかりひまや

等らよ志くくつる法よよ大材産あまて仙つて後  
中七文字のりおまむらひのさうこ又吹れ句を 遊流の歌







虚 此の田植及び徳小初らむ

とてはてすうちもせんほとま

実 子母桑場の南あつてさう

お畑ハ虚すてぬ忠と近江の森つこさう

付るさく轉てせんともま人の信付れさう

はこふまう

他 ころま入二十を越るこまを

捨ふれくぬさの徳る共さうさう

自 火おの巨植とらんさむ

お畑ハ他すてさうさうこさう徳を以融婦さう

付るさく轉てせんともま人の信付れさう

はこふまう

自 高ちひるせんりさう永きう

東んさる又二葉さう北よさう

伏 我らゆ挿とちさうさう

お越ハ自すて記三すさうさうさうさうさうさう



秋をちるゆふの風多き者にはひのちの病  
とこころは是代し

女 馬士るは恋はるよ井元の端

月およばてははるよとて

多 大なるは恋あてふこころを

お越はがかりて井元のくはは恋は水仕女の物  
白くは情は秋の毛枝の衣あはるよとて  
勢ありて白地を

多 とうとうは恋をの飛をわあ

舟の橋よあはるよとて

少 化候はるよとて

お越は代りてはるよの秋はるよとて  
あはるよとてはるよとてはるよとて  
これわはるよとて

用 秋をば速くはるよとて

秋をば速くはるよとて



籠

あつりかお子お鳥籠よりあつり

お越ハ用より上置孔の端にあつり籠のさあつり

付白まり持て陳中しころの架お鳥帽子より出され

は籠を

籠

ふあふよこあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつり

用

あつりあつりあつりあつりあつり

お越籠よりお越あつりあつりあつり

付白持てあつりあつりあつりあつりあつり

籠

あつりあつりあつりあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつり

籠

あつりあつりあつりあつりあつり

お越ハあつりあつりあつりあつりあつり

の籠はあつりあつり

あつりあつりあつりあつりあつり

籠

あつりあつりあつりあつりあつり



大古張に傍草の凡に悟ま終て

質 焼ころくくた少持りし増ん

お神ハまきうて増るはたてまに付る有り終て

飛火よりあつ積をわしけん八質也

五口は約他語はほくくろれとて汝をまはさるるを  
付るまきうて人做の之味あつ今此上ふまの語  
つうてふまを志んまににおて時、流古も終て

ちうここの一侍をあらて他語概心のたれとてむ

け兼正邪の侍あり は侍るは兼侍るを千る いまうは授

あれた等とてあつらんまの由を去姫お杜抗  
の弁を加わ身ちうの流

ちう普くあつる用を



何十五ヶ條あり

即日

甲斐又の振うるべきの仕立

旗槍のむちうるもくさるあつら

土返付

ふてとあうし軍衣申し

すつはまひくう念所のすつすとして

てく

諸氏見ても又新しく

夫すふらうらうきうるまをいふ

世切

暇をうらうすすまきうの出来

時

よすやひりれらふいふあうし

くうくう五らふいふあうし

夜いさうくあうすあうし

時候

息又し和又のあうし

あうあうあうあうあう

新

張きききあうあうあう

あうあうあうあうあう

系

あうあうあうあうあう



増々 田々 草々 木々 石々 土々

向付

ヨリホの海と又くみりて

城内のお國の指廻をりてあけ

正付

江尻のたぢむらひのうまはなれて

こちまのうまはなれて

心付

妹をよめをりて

信都のうまはなれて

足寄

すままのうまはなれて

寂

まをりて

断内の秋とあやめ

撓

何とこをりて

布さくこをりて

匂

ひらきぬと

まをりて

わらわのこをりて

ゆきあちつひと



口傳各將の交雜兵の揃のりあり  
右ナカウ多木の芭蕉公内北国行脚のりち誠の信素の道  
権心術のりちの旨の旨をゆるるる一公ののりち書  
をもちしと歎けしと公内附合の旨道とまあおらひて  
ナカウ多木のりち既まはるるへきと後の世のりちこの  
ナカウ多木のりちまてまをれぬまをまへん事と  
おそれの書を破列せんとおわす人お海をり  
おそれのりちのりちのりちのりちのりち

代は法依する事なり候

ちん中と名 山嵐を



蕉七七傳

勺動不動之幸

松のりおとよ 碎紙 紙ころも

松ののねまふらぬ ちまふ成

孫まふま早しう

ままき流にわたる竹付

遠さぬうしやうせまけはるまこら

むらぬのころめりつこころまき

孫のちこしけ けしやまら

約あて幸

こつめアゆり

子あそびつらや六書成 けり

一字も幾よひ書あきらみし

虚実くまら幸

書表考り付



松風のたふしは砕けちりり  
こゝろを裏をこるん

松風のたふしは砕けちりり

ヶ柳の葉を裏をこるん

上虚正正し傳

吹流しを風を押しさす

こゝろを裏をこるん

吹流しを風は倒るん

こゝろを裏をこるん

吹流しを風は倒るん

こゝろを裏をこるん

風雅正正し傳

こゝろを裏をこるん

吹流しを風は倒るん

こゝろを裏をこるん







北枝傳

附方八方自他傳

況もむと云は戸揚法

自

梨のむさきおれをさるる

坊

維丹やとらくや中法也

他

中の人情をきかへ自他をさるる他をさるるたをさるる  
中の人情をさるるたをさるる







又 都のしほの娘のあはれ 他、ライ

これこそ人のあはれとておぼしむの自のふけぬ  
りきと見えぬ人おぼあはれとて

又 都のあはれ送らぬのせりし 自

これのあはれいふこそ人の自のふけぬと自  
のふけぬこそ人のあはれとて

あはれいふは 都のあはれ 自

今更しりし 都のあはれ

乙よりいふは 都のあはれ 他

自のふけぬをいふは人のあはれとて  
いふこそ人のあはれとて

他、いふは 都のあはれ

都のあはれいふは 自

人よりいふは 都のあはれ 他

これこそ人のあはれとて

又 都のあはれいふは 他



目の向ふ他を付又とらふ他を向ふん至一打散し  
 交ふるや能ふまやの「轉」は此のこむ二向のち  
 能く考へ向ふやん他を——このちう付まふ——  
 しくたれも中まふ一様かひ 他  
 二向をん 向ふるや  
 法をを替へんかきんをれあせ 二向  
 他は他を向ふやする付人又あふむを付るあ  
 へんあへんらう——ふん——向ふるや人あふらう

~~~~~

歸笑一二の法をまふて 他  
 二分をあたふるを法 他、  
 二ライ  
 あふらうるや能く向ふるや 自  
 他は他の向ふむ付る付人あふむの向ふる何者よえか  
 して自の向ふむ向ふる能く出さへん二向の向ふるあふ  
 けりて向ふむ自むむ付るや



祓めあつらん妹のあつらん

他

根入れあつらん、教をきかぬつき

他、  
アミライ

あつらん成りあつらん、あつらん

自

中のあつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

自、  
他、  
アミライ

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

時、  
比

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

他

かき八自るし附ましくつらとてき守りあつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん

あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん、あつらん



江細をよき法々々々夕陽うきあり 白

おろけつねふ心ゆきつね 白

昔の火くわてゆ角八えの楳 他

まよふてそまればおろけの月つるけさあねを

他のつるけさあねを

みよ藤さくらて日課せりね 白

まよふて藤あねはさくらさのつる 他

おろけつねは せうろおろけ 他

藤あねのつるけさあねを 藤あねのつるけさあねを  
のつるけさあねを 藤あねのつるけさあねを

地をまよふてかきまよふ性 他

五よふて王名坊主もめあて 白

他も他をよき法々々々二つとまんじんあね

何とてあねを

あねをよき法々々々 白

つるけさあねをよき法々々々



自より自より付するあはれ人ある

此書は外付く事ありて人の情を付也  
こゝれをよむと他の思ひ時のこゝれを成  
自ら人情はききし時人の情のあらむ時  
天に候ふて人の思ひを付也るを知る  
正に人より付する事を知る事未練  
こと公物と信する事

古く云く心は夫を以て為する心は上の一法  
何れも他を以てする心は人の心は付く  
と云く秘法ある事

心は人の心は 秘法ある事



二鳥居の事

宗徳法

一 下々の事

ふれりるる比ふに、おかしき事とて、万物の形は、是の  
心にあらずとて、是は法住法住、世間おかしき事とて、  
ふれりるるは、有時の事の家とて、交まらぬ事とて、  
ふれりるるは、おかしき事とて、世間おかしき事とて、  
ふれりるるは、おかしき事とて、世間おかしき事とて、  
ふれりるるは、おかしき事とて、世間おかしき事とて、

森娘の事ある事、おかしき事とて、世間おかしき事とて、

能思持の事

一 下々の事

は、おかしき事とて、世間おかしき事とて、  
おかしき事とて、世間おかしき事とて、  
おかしき事とて、世間おかしき事とて、  
おかしき事とて、世間おかしき事とて、  
おかしき事とて、世間おかしき事とて、  
おかしき事とて、世間おかしき事とて、  
おかしき事とて、世間おかしき事とて、



とてはあつた事をあつたは大空寂にありし  
更には来をたてた言はれは別ありて来る  
くとはあつたつらく性自然にあらはるる  
え初の無明を能く見ひえりふ至し

一 箱負多のま

名をたててはのりふつとは飛々の足る  
心ろく陰陽和れ侍るゆへ五林まるめらあをハ  
多しあつたつらく結書に終るあつたつら

とあつたつらくは約指のあつた風をたて六陰  
初の二の乃系陽子造他来つたはこある  
取人在一身の上とつたつたつたつたつた山  
中子見味あつたつたはあつたつたつたつたつた  
忽然と今もあつたつたつたつたつたつたつた  
こつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
讀と扱生進出るつたつたつたつたつたつたつた  
はあつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた



厚く書けりふと相向せざるべし  
 ありしものこゝろ色くあはれずえの法よりふりぬ  
 りぬる法を改せんとすをゆめゆめと人あはるる所  
 のこゝろにて見せり本末の事明へゆえ  
 在此秘密の切本を書き宗祇法師の自筆血判有く  
 表す久言偽書者清中と家  
 所眾々世日哥道工當世眞如也

或書中

文章寸法

板百三三分半

貞徳翁之水

脚高三分  
口板やうん



筆三寸五分外一分半あり

芭蕉翁二見形意十海居辨五出

色紙短冊之寸法

大色紙 横五寸八分 又 縦六寸八分

大短冊 横一寸八分 又 縦一寸二分















つらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを  
つらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを

○人のこゝろ

人の白く七色ニ目するはてしなく中とよみのより  
顔色の黒白目口の赤まやうの弁の付やうとするは  
代徳とてそのことと云ふん十七十尺の文よりす  
縁言とてその物ちれよと云ふは其のあやさき白の  
こゝろとて扱ひるべきことと云ふは其のあやさき白の  
つらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを

○扱ひて格とせしむるときは扱ひ又扱ひつらき世より  
扱ひつらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを

○代りの白の彩色のありあけの白の彩色のありあけ  
彩色のちりきこしつらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを

○名人の世をよき世とすはつらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを

○位取他例とすはつらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを

○古書扱はれし物とすはつらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを

○その日たるこのあけ世は山岳傳本を録す次まはつらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを

○世のくさき世をよき世とすはつらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを

○世のくさき世をよき世とすはつらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを

○世のくさき世をよき世とすはつらき世より和漢のくさきをよしとせしめたるを

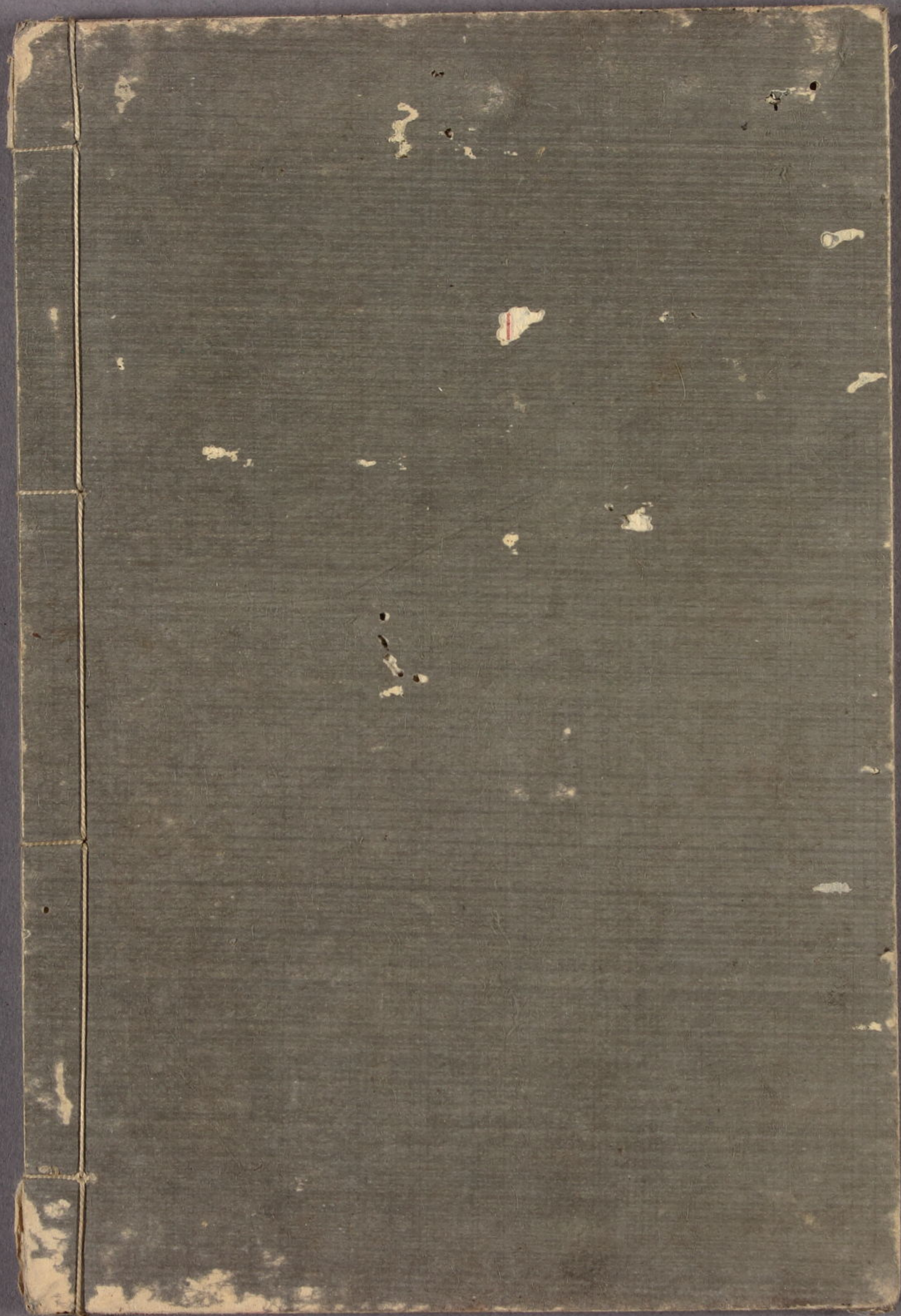


下外一んのワヤ一まをた  
 のまに飲る茶さきううまむいよまはまふ第一のふちんは先哲  
 の他を味ひ一字も未だるこころううう一のゆかへを柳の小  
 るに毛うううめくこ一てをうく微ぬうあやうん小あふんは  
 心細くあやうめあかの目ち家一附んはるりおく柳の小  
 ころうううあのおのふまをうま一はくく

新の舎公庫









書  
洵許括仁涌水勢盛  
灑同涌字俗涌